

## 「ハックルベリーフィン」の方言

著者	篠田 成之
雑誌名	日本歯科大学紀要．一般教育系
巻	4
ページ	315-354
発行年	1975-03-25
URL	<a href="http://doi.org/10.14983/00000128">http://doi.org/10.14983/00000128</a>



# 「ハックルベリーフィン」の方言

新潟歯学部 篠田 成之

Seishi SHINODA: The Use of Dialects in *The Adventures  
of Huckleberry Finn*

(1974年11月15日 受理)

## 「ハックルベリーフィン」の方言

### 1

Mark Twain は、Bret Harte と共に、アメリカ文学に自信をもって方言をとり入れ、それに成功した先駆者の一人である。共に Pike County 方言\*を用いているが、Twain が主人公にその方言で語らせた *The Adventures of Huckleberry Finn* (1884) は、アメリカ文学の古典としてその地位を確立している。

主人公の Huck に方言で語らせたことは成功した。悉しく触れる余裕はないが、背景となるのは繊細さを欠いた茫洋たる自然で、素朴な表現に適しており、人間も主人公と同じく粗野で単純な人々である。何よりも、Huck が自分の言葉で自分の経験を語ることによって読者との間に親密さが生れるのは強味である。更に少年の素朴な眼を通して眺めた自然の描写は新鮮な美を生み、大人と違った角度からなされる人物の描写は、意外の鋭さを持っている\*\*。

---

\* Pike County 方言は、Mississippi 河に沿った Missouri, 南部 Illinois, Arkansas, 北部 Texas 地方の方言である。John Hay の *The Pike County Ballads* (1871) が文学にとり入れられた初めである。[Herzberg: *The Reader's Handbook of American Literature* (1962) による。]

\*\* 風景描写の例としては、XIX と XXXII のそれぞれの初めの部分をあげることができる。Huck の Grangerford 家の装飾に対する讃美 (XVII) はかえって当時の開拓地の文化の低俗さを読者に印象づける。XXII のサーカスの描写が効果的なのは、それに驚嘆する無知な少年の眼を通して見ているからである。Jim を解放することを犯罪と考える Huck が、遂に自分が地獄に堕ちても Jim を助けようと決心する過程は、正面切った奴隷制度の批判より遥かに痛烈である。

Twain は本文に入る前に Explanatory として別に一頁を設けている。その大体の内容は次のようなものである。「この本には、ミズーリの黒人方言、南西部辺地方言の極端なもの、普通の Pike County 方言、そして最後のものの変種4種類を用いている\*。それらの間の相違はいい加減に、又はあて推量でつけたものではなく、骨を折ってやったものである。而も自分がそれらの方言をよく知っているという確かな根拠を持っている。こんな説明をつけるのは、そうしないと、読者は、人物が皆同じ喋り方をしようとしながらうまく行っていない、と思ってしまうからである。」

この小論では、どの人物がこの中のどの方言を話しているかを見て行こうと思う。専門家でもない者がこういう事を試みるのはおこがましいと言われそうであるが、筆者はアメリカ方言の研究をしようというのではない\*\*。この作品中の人物の発言を調べて行けば、その特徴が解る。語り手の Huck の言語の特徴と比較検討すれば、それらはある程度迄階層、或は群に分けることができよう。それを言語以外の特徴とつき合わせれば一応の分類ができるだろうと思うのである。結果を先に言えば、最後の4種の変種全部を明確に指摘することはできないにしても、Pike County 方言を4~5群に分けることができることが略々解った。

この仕事をして行く過程で、作者が各人物の発言にどういう方法で特徴を与えているかを見て行こうと思う。又作者が多くの方言を取り入れた事が、文学的にどんな意味を持つかということも明らかにしたいと思う。

Twain が上にあげたことわり書きの最後に述べた心配は、必ずしも杞憂ではなかったようである。少なくとも現代の読者は、それらの方言を書き分けてあることに無関心な

---

\* "..., to wit: the Missouri negro dialect; the extremest form of the backwoods Southwestern dialect; the ordinary 'Pike County' dialect; and four modified varieties of this last."

という書き方から考えると、Twain が Pike County 方言を普通のものと、それ以外の変種4種類、計5種類を考えていたと見るべきであろう。

\*\* George Philip Krapp: *The English Language in America* (1952), Vol. 1, Ch. IV この中で Krapp は、文学作品に現れた方言は、分析してみると、俗語の基盤の上に方言をいくらか混えて方言的な印象を与えたにすぎないものであって、その特徴を網羅的に記述する科学的研究とは異なることを指摘している。Twain は方言に忠実ではあったが、所詮文学としての制約は免れない。

のではなかろうか。というのは、アメリカで出版された、高校生か大学初級生向きと思われる解説書が、この点に触れて、「南西部辺地方言の極端なものというのは、Huck の他が話している。そして中産階級の登場人物の言語が、変種4をもつ普通の Pike County 方言である。」と書いているのを見たからである\*。如何に安直な小冊子であるにせよ、専門家と思われるものがそういういい加減な事を書くのだから、一般の読者が無関心であろうことは想像に難くない。

しかし、Twain がこの為に使った努力は果して徒勞に終わったのだろうか。筆者には、そうは思えないのである。

## 2 Huck

### 2・1

この作品の中で扱われている方言には、南部に行くにつれて変化する地域的なものもあるが、主なものは社会的な方言であると考えられる。Huck の方言は、より下層の要素も含んではいるけれども、先ず広い意味での「普通の」Pike County 方言である。従って、彼の言語と比較することによって、他の人物の言語がそれより上のものか、下のものかが解る\*\*。それに語り手であるだけに、彼の発言は圧倒的に多く、資料が豊富なので、他の人物のものよりも正確に記述することができる。この様な理由から、先ず彼の言語から調べて行こうと思う。

### 2・2 音 韻

音韻的な特徴を記述するには、作品中の綴字に頼る外に方法はない。伝統的な綴字と異った綴字がどんな音を表わしているかは正確には解らないわけである。又綴字による区別も必ずしも一貫してはいない\*\*\*。その上、方言的印象を強めるために、所謂“eye-dialect”

\* *The Adventures of Huckleberry Finn: Notes* (Cliffe's Notes, Bethany Station, Nebraska, 1963)

\*\* 方言について上・下という時は、標準語に近い、遠いという意味に解釈して戴きたい。

\*\*\* 黒人の発音で、有声音の“th”を表すのに“d”を用いるが、果して本当に“d”の音なのかは現在では解らないわけである。(cf. Krapp, I, p. 249) Huck の“yellow”は“yaller”と綴ってあるが、比較級は“yellower”である。



を用いることもある\*。こういうわけで不確実な要素は多いが、何といっても Twain が綴字によって発音の差を忠実に示そうとしていた事は、調べて行くうちにはっきりする。完全に一貫していないとは言っても、多くは解り難さや、紛わしさを避ける為であって、決していい加減ではない。従って筆者は彼の綴字を尊重して見て行こうと思う。

### 2・2・1 母 音

現代の標準語と異なるものを列挙するが、現在でも俗語等にあるものが多い。当然のことながら、古い音の保存されているものが多い。これは母音以外についても言える。

その音を含む語を代表として一語宛あげる。

- |                             |                       |
|-----------------------------|-----------------------|
| (1) deef (deaf)             | (11) sejest (suggest) |
| (2) resk (risk)             | (12) varmint          |
| (3) [git] (get)             | (13) bust (burst)     |
| (4) yaller (yellow)         | (14) nuther (neither) |
| (5) ruputation (reputation) | (15) chaw (chew)      |
| (6) gether (gather)         | (16) obleege (oblige) |
| (7) tromp (tramp)           | (17) pison (poison)   |
| (8) ca'm (calm)             | (18) rair (rear)      |
| (9) ruther (rather)         | (19) cler (clear)     |
| (10) ha'nt (haunt)          |                       |

(3) と (6)、それに範囲はやや異なるが (14) と (19) は、限られた群にしか見られない。その他は殆どこの作品中の言語全体に共通していると考えられる。勿論これらの語を発していない人物も多いが、それらは他の特徴から推定できる所属群から判断して、これらの音を持っているだろうと考えるわけである。最上層に属するものは、この中の一部分を欠くであろう。(1) は18世紀には正しいとされていた。Webster は1828年版迄この発音をあげていた。(2) OED は17世紀の resque という綴字をあげている。その発音が保存されていたとしても不思議はない。(3) は Huck では例外的で、慌てて Jim を起す時に使

\* Krapp の用語 (cf. II, p. 228)。たとえば, Jim の場合 kin, k'n と綴る。標準語でも k'n の発音はあるが, 上層の人物では常に can と印刷される。これは視覚的に両者の差を目立たせることになる。

っている。常は get である。18世紀には教育のある人の間でも git は用いられていた。この作品の中では、git は Huck より下の層の発音の特徴の一つとして利用されている。(4) 強勢のある母音は、18世紀には正しくないと指摘されており、綴字の影響がこれを消滅させた\*。[i], [ɛ], [æ] の音の間には全体として動揺が見られる。語尾の音は転訛ではなく17世紀の音が保存されたもの\*\*。(5) 強勢のない音節でのこの発音は標準語にもある。専ら視覚的効果を狙ったもの。(6) catch の母音を [ɛ] に発音するのは18世紀には多く、批難され乍ら残った\*\*\*。尤も Huck は gether は使うが ketch は使わない。それより下の層の特徴となっている。(7) は現代の辞書にも異音としてあげてある。(8) 18世紀にはこの方が正しいとされた\*\*\*\*。(9) [ɑ:] より短い [ɑ] 乃至 [ʌ] 音を表わしたものであろう。far も fur と綴られる。この発音が現代の毛皮の意味を持つ語の発音と同じとは考えられない。ruther と同じ音を表すのであろう。(10) の綴字は [ɔ:] でなく [ɑ:] 又は [ɑ] であることを示すもので現在 Webster はこの音も載せている。(11) は専ら視覚に訴えるもの。(12), (13) は現在口語では一般的である。(14) Huck には neither もあるが、彼より下の層は常に nuther である。(15) 広く行われていたが、18世紀末には既に方言・俗語となった。(16) は古風の発音としては19世紀迄普通語に残った。(17) pison 又は p'ison. join, boil 等もこの音。17—8世紀には普通で、アメリカでは19世紀にかかる迄一般的であった\*\*\*\*\*。(18) 英国の16—7世紀の発音で方言に残る。アメリカで保存されても不思議ではない。(19) [klə:] ではなく [kleə] の音を表すものと考えられる。Krapp は18世紀の詩で clear を air と韻を踏ましている例をあげている。(II, p. 110) OED は18—9世紀の方言として clair をあげている。

Set (sit), raise (rise) の混同等一般的なものはない。

\* Krapp, II, p. 93.

\*\* Krapp, II, p. 35.

\*\*\* Krapp, II, p. 93.

\*\*\*\* Krapp, II, p. 36 ff.

Mencken: *The American Language* 4th ed. (1936) によれば, B. Franklin: *A Scheme for a New Alphabet and a Reformed Spelling* (1768), Thomas Sheridan: *A General Dictionary of the English Language* (London 1780) は共に [ɑ:] 音を斥けている。(p. 335)

\*\*\*\*\* Krapp, II, pp. 197-8.

## 2・2・2 子 音

- |                             |                            |
|-----------------------------|----------------------------|
| (1) cretur (creature)       | (4) sqush (squash)         |
| (2) a-holt (a-hold)         | (5) mushmellon (muskmelon) |
| (3) mud-turkle (mud-turtle) | (6) whollop (wallop)       |

子音にはそれ程特徴は認められない。(1)は殆ど全般に分布しており、(2)も上層を除いて広く分布している。他のものは特殊な語で、外の人物が使っていないから分布がはっきりしない。

(1) [tʃ] の音は17世紀から発達して、18世紀には [tə] の発音を支持するものと [tʃə] を支持するものとの論争が起ったが、結局後者が標準音とされるに至った。アメリカでも18世紀後半には *natur* の発音は俗語・方言とされる\*。この作品の人物は全般的にこの音である。(2) この音は、この作品では上層を除いて、一般的である。(3) はよくある転訛である。Huck の名 *Huckleberry* も *hurtleberry* 或は *whortleberry* の転訛である。(4) は [kw] が [k] に発音されることを示す。(5) は或は *mush* と連想した *popular etymology* ではあるまいか\*\*。(6) アメリカで *wh* を *w* と発音するのがいけないとされるので、反対に *w* を *wh* にして了ったものである\*\*\*。

## 2・2・3 音の脱落

下に例をあげるが、大部分は標準語でも早口の会話では落ちるものである。視覚的に方言の印象を強めるためであろう。*t'other* は全体に分布している。

なお音や音節の脱落は下層に行くほど多く、特徴の一つとして利用されている。

- (1) 'low (allow), p'simmon, C'lumbus
- (2) le's (let's), for'ard
- (3) t'other, 'stead (instead), 'thout, 't (that), 'a' (have)

## 2・2・4 音の追加

*jimpson weed*, *chimbley* 等起り易い現象であるが、語尾に -t のつくものが多い。標準語の *against* にも見られるが、Huck には *girafft*, *roust* (*rouse*) 等がある。彼よ

\* Krapp, II, p. 234ff. Webster は *natur* の支持者であった。

\*\* Craigie: *A Dictionary of American English* は Colloq. としてのせている。

\*\*\* Krapp, II, p. 245 に *we'll* を *wheel* にした例があげてある。



り下層になるともっと多く、特徴的となる。

### 2・3 文 法

Huck の言語は Pike County 方言のほぼ中間的なものであるから、その文法的特徴を記述すれば、大体この方言の全体にあてはまる。中には彼より上層には含まれていないものもある。又彼より下層にしか見られないものはあげてない。特徴は局部的なので、多少の乱雑さを顧みず、品詞別にまとめた。従って統語上の問題は主に動詞の項で扱う。概して俗語の特徴とされているものが多い。

なお、紙数の関係で例は最少限に止めた。ページ数は“Authorized Uniform Edition”(1884)\*による。

#### 2・3・1 名 詞

不変単数の多いことが目立つ。特に数詞を伴う距離・長さは常に不変である。しかし副詞的に使われた場合 -s をつける事がある。

went down to the store, three miles, to the ferry (p. 33)

#### 2・3・21 代 名 詞

me が主語として用いられる。但し単独では I で、他の名詞や代名詞が加わる時だけ。

me and my brother was over on Spanish Island (p. 383)

なお、教育のある者は名詞や代名詞と並んだ時に I を先にすることはないが、Huck は常に me を先に出す\*\*。この作品の巻頭の“Tom and me...”というのは例外で、Tom を紹介している所だからである。

them は those の意味で使われ、時に they の代りに用いられる。前者は殆んどの層にある。

one of them kind (p. 22) // what's them? (p. 369)

#### 2・3・22

-self の3人称は themselves, his own self で、彼より上の層にはこれはない。

\* 新潟大学人文学部向井照彦助教授の御好意により同氏所蔵のものを使用させて戴いた。

\*\* Mencken は上のような例をアメリカ俗語の一般的特徴とする。(p. 456) 又、学校で教えてもなかなか直らない文法的な誤として、me が他の名詞や代名詞に先行する点をあげ、1936年 Dr. Charters が小中学程度について行った調査を引用している。(p. 420)

## 2・3・23

古い形の *ourn*, *yourn* を保存している。外に *their'n*, *his'n*, *hern*。

## 2・3・24

人物や人名が主語になった時、その後に代名詞を重ねることが多い。

The widow she cried over me (p. 2) // Miss Watson she took me in the closet (p. 15)

これは何等かの意味で強調がある場合に限られる。たとえば、話題が変わって新しい人物について述べる時（前の方の例）とか、2人の人物の区別をはっきりさせる時（後の例）とか。なお、Ch. III の初めの2頁程がいい例である。

## 2・3・31 関係詞

俗語では、やや複雑な関係詞構造に誤が多いが、Huck も同様である。余剰語の入る例。

this is a girl that I'm letting that old reptile rob *her* of her money (p. 242)  
a little one-horse log church..., which he built *it* himself (p. 314)

## 2・3・32

上例は *that* で承けているが、*which* も人間を先行詞として用いる。

he would buy his wife, *which* was owned on a farm close to where Mrs. Watson lived (p. 123)

俗語では一般に *whose* や *whom* を余り使わないが、Huck も次の様に言う。

a considerable parcel of people *which* he didn't know the names of (p. 35)

## 2・3・41 形容詞

比較級、最上級の *-er*, *-est* に更に *more*, *most* を重ねることがある\*。

it made me feel much *more easier* (p. 288) // it was the *most thrillingest* one that ever was (p. 209)

## 2・3・42

上例にも見られるが、*-er*, *-est* を多音節語にも自由に使う。splendidest, careless-

\* Mencken はアメリカ民衆の言語の一特徴としてあげている。(IX, 5)

sest, mixed-upest-looking 等。

### 2・3・51 副 詞

現代口語でも that を副詞に用いるが Huck には that glad and happy という風に使うことが多い。so~that の so に相当する場合は、後の that は省かれる。

### 2・3・52

副詞の only を次のように否定語を入れて使う。彼より教育のある Tom も同様。

[2・3・78 (b) 参照]

I hain't got only a dollar. (p. 29) // they didn't have only a guard of four hundred soldiers (p. 17)

### 2・3・53

always 等の類推で -s をつける副詞が多い。副詞語尾と感じているように思われる。anywheres, nights, nighttimes, daytimes; a long ways off, a little ways

### 2・3・54

標準語では必要な要素を省いた副詞句、節が多い。特に in, for はよく省略される。he couldn't *no way* (=in any way) make up his mind (p. 359) // *Come to think* (=...of it), the logs ain't a-going to do; (p. 359) // I got so sleepy I couldn't keep my eyes open *all I could* (=for all...) (p. 39)

なお、次の様な形の副詞句は度々出る。

The first thing I knowed I was asleep (p. 48)

### 2・3・55

単純形副詞 (-ly のない形) を多用する。hardly, scarcely 等の一部の副詞の外、すべて -ly をつけない。uncommon long hair; clumb up as *easy* as I could 等。

### 2・3・61 前置詞・接続詞

“off of” という例が多い。標準語で、off を単独に、off from として、或は of 単独に使う場所にこれを用いる。上層では off from は用いる。

slipped Jim's hat *off of* his head (p. 8) // I'd borrow two or three dollars *off of* the judge for him, (p. 32)

しかし、slip *in* the kitchen // scramble *out of* the window は、現在の用法とむ

しろ反対である。

### 2・3・62

アメリカ語に英本国語の17—8世紀の形が残っていることはよく知られているが、次のいくつかの接続詞は、古い用法の保存されているものである。その中 (a) は現在一般に認められている。

#### (a) *Like*

接続詞として OED は16世紀以来 Shakespeare を含めて引用しているが、英国では俗語となっている。Huck は常に *as* 又は *as if* の意味で使っている。

does a cat talk *like* we do? (p. 110)

#### (b) *So*=if, provided that

この古い用法も Huck には保存されている。

I ain't no ways particular how it's done *so* it's done (p. 341)

#### (c) *till*=before

主に否定文と共に現われるこの接続詞は、OED には18世紀迄の例をあげ、現在は方言及び米語としてある。

it warn't long after that *till* I was used to being where I was (p. 33)

#### (d) *only*=except that

これも英国では廃れ、アメリカで通用していると考えられる。この意味では OED は *only that* だけを普通に扱い、*only* 単独のものは廃語として1802年の例を最後としているのに対して、Webster は普通に扱い、現代の例をあげている。Huck の例。

there warn't really anything the matter with them — that is, nothing *only* everything was cooked by itself. (p. 2)

#### (e) *without*=unless

*that* を伴わない形は、OED によれば、初め文語、次に口語、現在は無教育な用法。しかし Webster は方言としてあげている。

You don't know about me *without* you have read a book by the name of *The Adventures of Tom Sawyer*; (p. 1)

### 2・3・71 動詞の活用



活用形は単純化されている。現在形と過去形が同一であるとか、不規則動詞が規則動詞になっているとか。過去形と過去分詞が逆になっているのも目につく。紙数の関係で主なものだけあげる。括弧に入ったものは、この作品には出ず、Mencken に借りたものである。

begin	begun	(began)	go	went	went
bring	brung	brung	know	knowed	knowed
catch	catched	(catched)	run	run	ran
climb	clumb	(clumb)	see	see, seen saw	see
come	come	(come, came)	set	set, sat	(sat)
do	done, did	done	speak	spoke	spoke
eat	eat	(eat, ate)	throw	throwed	throwed
give	give	give			

do は本動詞の過去形が done, 助動詞は did

And nobody that *didn't* belong to the band could use that mark, and if he *did* he must be sued; and if he *done* it again he must be killed (p. 10)

see の過去形は稀に saw だが普通 see と seen が用いられる。Huck の場合、普通は see。ever や never の後も see (例外的に saw)。生き活きた描写又は強調のある場合は seen。(なお歴史的現在を多用するので注意を要する。)

I looked over my shoulder...and twice I *seen* Harney cover Buck with his gun (p. 149) // I *seen* where one of the bullets went in (p. 199)

上の活用形は Pike County 方言のみならず、作中の人物の略々すべてに共通している。

## 2・3・72 主語と動詞の一致

Pike County 方言全体に大体共通しているが、小部分は教養の程度によって差がある。次に Huck の場合を、(A) be (B) 一般の動詞、に分けて記す。

(A) *be*

(a) 現在形

主語が代名詞の場合は標準語と同じ。名詞の場合は、“there is~”の形も含めて、単

数複数共に *is*, 否定はすべて *ain't*。

(b) 過 去 形

肯定はすべての人称, 数共に *was*, 否定ならばすべて *warn't*。

(B) 一般の動詞 (助動詞 *have* を含む)

現在形の肯定は, 代名詞が主語ならば標準語通り, 名詞ならば常に単数形動詞を用いる。

*Has there been many killed?* (p. 151) // *the way people down there gets Congress water* (p. 239)

否定ならば, 人称, 数に拘らず *don't*。

*it don't make any difference* (p. 118)

多少ある例外は, Jim と話す時に彼と合せる為かも知れないし, 又作者の不注意かも知れない。

2・3・73 *ain't, hain't*

便宜上ここでまとめることにする。Huck は *be* には *ain't*, *have* には *hain't* と使い分ける。時には *have* の場合に *ain't* を使うこともあるが, *be* に *hain't* を使うのは例外的である。

*Hain't your uncles obleeged to...?* (p. 268)

なお, この使い分けは幾分教育程度を示しているように思える。(4・4 参照)

2・3・74 歴史的現在

一般に叙述の際に多用する。VII の初めにある次の部分は興味がある。

Well, I *was* dozing off again when I *thinks* I *hears* a deep sound of "boom!" away up the river. I *rouses* up, and *rests* on my elbow and *listens*; pretty soon I *hears* it again. I *hopped* up and *went* and *looked* out at a hole in the leaves, and I *see* a bunch of smoke laying on the water... (p. 51)

Huck は話の途中に挟む "says I" 等の外は I の場合動詞に -s をつけない。それなのに歴史的現在のすべてに -s をつけている。思うにそれは現在形を強調する為であろう。現在形の動詞に常に単数形を使う習慣 (主語が名詞の場合) から来ているであろうし, 又 *see* などに -s をつけなければ過去形と同じになるという事情も関係しているで

あろう。

2・3・75 a- という前綴

(1) 進行形では、“be+*ing*”と“be+a-*ing*”の二つの形がある。

(2) 述詞に使う場合は a-*ing* が多い。

I stood a-*looking* at him // I set (=sat) a-*shaking*

(3) 分詞構文の場合 a- はつかない。

I laid there... *thinking* about things, and *feeling* rested and rather comfortable and satisfied (p. 51)

(4) 分詞以外に a- のついた形が残っており、殊に “take a-*hold* (又は a-*holt*) of” という形は多く出る\*。“can't a-*bear* to see” (p. 258) という古い形も保存されている。

(5) “got a-*front* of us” (p. 315) という例がある。これは “got a-*front*” 又は “got a-*front* us” でいいものを “in front of us” から類推したのであろう。又 “I didn't hurry; I couldn't if I'd a-*wanted* to” (p. 134) というのは、この方言の “if I'd 'a' wanted to” という構文の綴字を誤ったもので、Huck の無教育を示すためと思われる (2・4 参照)。いずれにしても、上例と共に “a-*~*” という形が多く使われて一つの定型となっていることを示している。

2・3・76 不定法

分離不定詞が常態である。次の例の示すように、拘束なく自由に使う。

I must try to not do it (p. 3) // Please to don't poke fun at a poor girl (p. 83)

目的を表す to-phrase は、常に “for to” である。

I never waited for to look further (p. 55)

2・3・77 動名詞

begin to の意味で “get to+動名詞”, “go to+動名詞”, 又, “set ~ to” の後に原形でなく、やはり動名詞を用いる表現が目立っている。全体として動名詞が多用されている印

\* この意味の a-*hold* は OED では1933年の Supplement に初めて出, “take a-*hold* of” は 1972年の Supplement に初めて出ている。a- は前置詞としているが, Webster は “多分冠詞” としている。



象は受ける。

I *got to thinking* (p. 44) // He *went to crying* (p. 40) // There was a place on my ankle that *got to itching*... then my ear began to itch (p. 6)  
a perfect ripper of a gust would... *set the branches to tossing their arms* as if they were just wild (p. 67)

## 2・3・78 否 定

### (1) 多重否定

(a) 当然予想されるように、多重否定は全体に共通している。Huck には次の様な著しい例がある。

I...ain't got no property no more, no nothing, and no way to make my living. (p. 299)

(b) 否定語の後に、それを弱めるように *hardly* 等を重ねる例もある\*。

I didn't know *hardly* what to do (p. 83) // Jim said nobody would know me, even in the daytime, *hardly* (pp. 75-6)

(c) *ever*, *any* 等が入ると二重否定にならない。下の例の最後のものは、誓の文句であって意味が強いから *never* としたものだろう。

I didn't want to go back to the widow's *any* more (p. 35) // I hadn't *ever* heard *anybody* say it was *any* way to keep off bad luck (p. 5)  
only to swear that I wouldn't *never* do *nothing* to grieve her *any* more (p. 391)

### (2) *only* に伴う否定語

副詞の *only* が否定語を伴うのは標準語と異なる。2・3・52 にあげた例の外にもう一つ。

I reckon it don't work for *only* just the right kind (p. 53)

前置詞の *only* (=except) から発達したものであろうか。或は、二重否定と類似の心理が働くのであろうか。OED には *only=except* として次の例をあげてある。

\* Cf. Jespersen: Modern English Grammar Bk V, p. 454.



Don't cross the line only by the bridge.

(3) 語法違反の否定

これは多重否定が語法違反だというのは意味が異なる。多重否定は実際通用していたものが規範文法によって否定されたのであって、心理的にも根拠がある。ところが次例のような表現は論理的にもはっきり矛盾した表現である。(現代米俗語に見られる。)

he couldn't seem to shake it loose (p. 119)

can も否定も、shake に関係しているのであって seem とは無関係である。当然 “he didn't seem able to ~” 又は “he seemed unable to ~” となるべきものである。ところが “he seemed to ~” → “he didn't seem to” と同じ関係であると誤った類推をして “he couldn't seem” としたものであろう。この表現は多く見られ、Tom にも

I can't somehow seem to understand it no way (p. 312)

という例がある。従ってこの言語社会で通用する表現と見なければならない。文の構成に類推が如何に大きな作用をするかを示す例と考えることができよう。

2・3・79 動詞の省略

(1) be

“be going to” の be は普通省略する。

How you going to get them? (p. 19) // what we going to do? (p. 341)

(2) have

助動詞につづく完了形の have は省略されることが多い。使用頻度の高い語は省略され、そうでないものは残る傾向がある。

I couldn't *stood* it much longer (p. 3) // they wouldn't *took* // it wouldn't *made* // you ought to *been* // I wouldn't *done* // he wouldn't ever *dared* to // I could almost *kissed* 等多い。

しかし次例のような動詞には have がつく。

he could 'a' *touched* him // You wouldn't 'a' *noticed*

次の例も having が省略されているもので、ここにつけ加えておくべきであろう。

hewed logs, with the chinks stopped up with mud and mortar, and these mud stripes *been* whitewashed some time or other (p. 303)

## (3) その他の動詞

He warn't a boy to meekly along up that yard like a sheep (p. 315) // I out with my knife and cut the rope (p. 99)\*

## 2・3・10 動詞以外の省略

## (1) 関係詞 主格の省略された例。

Maybe there's something ain't straight about it (p. 293)

(2) 接続詞 “So ~ that”, “so that ~” の *that* は現代アメリカ口語と同じく Huck も略す。(例は省く。) しかし次のように加える事もある。

[I would] get so far away *that* the old man nor the widow couldn't ever find me any more (p. 36)

## (3) [It] seems

*Seemed* like I'd die if I couldn't scratch (p. 6)\*\*

## (4) 副詞句中の前置詞 (2・3・54参照)

## 2・3・11 余 剰 語

省略が多い反面、余剰語を含む冗長な表現が多いのも一つの特徴である。それには次に示すように、色々な原因が考えられる。

(1) more + -er, most + -est 2・3・42 にあげた外、多く見られる。more gaudier, much more easier 等。多重否定と同じ心理に基くのであろう。

## (2) a half a mile; a many a time

その他 day, minute 等の例がある。“half a mile” の型が定型となった為、“a” が冠詞であることを意識せずに、更にもう一つ冠詞を加えたものと考えられる。次の項も同じであるが、教育程度の低い人の方言には、前後をわきまえずに定型に当て嵌めて了うという、一種の無精さが見られる。

## (3) “If they (etc.) 'd 'a' + 過去分詞”

*if he'd 'a' slayed* where he was *he'd 'a' been* a tolerable sick rat (p. 82) // *if*

\* Cf. OED *out*, adv. 13 b.

\*\* Cf. OED *seem* 8 g. “colloq. or vulgar, esp. in *seems to me*”.

*they'd 'a' knowed* the money was there *they wouldn't 'a' left it.* (p. 72)

上の文で、条件節の 'a' (have) は余計である。この種の、過去の事実と矛盾する事を假定する文の帰結節では、“主語 + 'd + 'a' + 過去分詞” という形が固定しているので、(その場合 'd が would であるなどということは考えない。ただ 'd という形で) それをそのまま条件節にも当て嵌めたものであろう。動詞が have であっても同じように

*if they'd 'a' had* some bullets in, (p. 53)

となる。これは Huck に限らず、一部上層の者を除いて全体に共通である。

#### (4) *than* の後

there may be bullier circuses *than what that one was* (p. 207) // it made me feel much more easier *than what I was feeling before* (p. 288)

Huck だけでなく、一般に *than* の後は上例のような長い形にする。*than* は前置詞と感じられている事を示している。

#### (5) そ の 他

散漫ではあるが文法的に興味のある例。

I felt good and all washed clean of sin for the first time I had ever felt so in my life (p. 296)

“I felt good...for the first time” と “it was the first time I felt...” との混淆であるが、Huck の無教育を示すためであろう。

his idea about how to run in daylight without it being dangersome to Jim (p. 180)

“without danger to Jim” ですむ所をわざわざもってまわったような言い方をしているようにも思えるが、2・3・77に示した様な動名詞構文が多いこと、without が接統詞としても用いられ、使用頻度が高いという事情等を考えなければなるまい。

#### 2・4 綴字の誤その他

Huck は、語り手として、少年でいながら自分より上層の言語も下層の方言も書きしるさなければならない。読者の方では、仮に時々その点に不自然な感じを持ったとしても、話が面白ければ余り気にはしないと思われるが、作者は気になると見えて、時々彼を本来の階層に引き戻してみせるのである。誤った綴字を散在させているのは、その意図からで



ある。しかしそれが行き過ぎないように気を配って、50種類くらいあるものを、400頁ばかりの中に適当にバラまくようにしている。一々挙げることはしないで、いくつかの例を種類別に示そう。

(a) 書物に縁遠い人間なので、やや難かしい単語は発音綴字にしている。初の4例はこの方言の発音を示す点で興味がある。

counterpin\* (counterpane), seegars (cigars), parlyment, doxologer (doxology), sivilize, razberries, Judus (Judas)

(b) 知識がない為、部分的にまちがえる。最初の例は、古形を残しているのではなく、sorrowful 等からの類推と思われる。

sadful, frivolishness, dissenting minister, nervious, remainders (remains), Goliath (Goliath)

(c) 外来語等難かしい語は想像力を働かせて英語化する。その為に滑稽な、時には皮肉な効果を生むことがある。

yellocution, dolphin (dauphin), meedyevil (medieval), juice-harp (Jewish harp)

juice-harp は Jim も使うが、Tom は Jewish harp である。

なお、語彙については、一般の辞書に載っているものが主であり、この地方特有としてあるものはないので省略する。地方色は主として自然の風物と人間の生活から生れる。ただ Huck には次のような奔放な表現があることを書き添えておく。

they lost their steering-oar... and went a-floating down.... and saddle-baggsed on the wreck (p. 102) (saddle-bags を動詞に)

she got to talking..about how much better off they used to was (p. 78)

### 3 Jim

Huck と並ぶ重要人物である Jim の描写に成功していることが、この作品の強味の一

\* Counterpin は分布の広い方言であって Huck だけでない。



つになっている。その成功は、単純素朴な黒人の言語表現を巧に利用するという文学的方法によるものである。Jim の発言は、紙面を一瞥しただけで区別がつくように、綴字等に特色を持たせてある。

一言で言えば、Jim の言語は、音韻、文法、の両面に互って単純化されている。その為に素朴な力強さは生れるが、細かな陰翳は犠牲にされる。

### 3・1 音 韻

この点を考えるに当っては、Huck の場合と同じく、綴字という問題を考えなければならぬ。作者は、Jim の発言を他のものから際立たせる為に、音の相違以上に綴字を変えている。他の人物も、強勢のない場合 “wuz”, “uv” 等の発音をしている筈であるが、そう綴られているのは Jim の場合だけであり、他の人物にあっては常に伝統的な綴字が用いられている。又綴字の差が必ずしも音の違いを表わしているわけではない。master と sir は、“marster”, “sah” と綴られており、一見 r 音の差を示しているようであるが、そうではない。要するに、綴字は単に発音の違いを表す為ばかりではなく、方言の印象を強める為にも利用されているのである。

#### 3・1・1 母 音

全体として、上下、前後の両方向共に幅が縮まっている為に、調音の範囲が小さくなり、従って幾つかの異った音が中間的な一つの音にまとまる傾向が見られる。

##### (1) marster; sah; fur (far)

奴隷の使用者が英国南部の方言を話していた為に、黒人方言は南方方言やニューイングランド方言と共に、r の響のない [a:] 音を保存している。marster はその音を伝統的な綴字で表わしたものである。far が fur と綴られ、sir が sah と綴られるのは、次の理由によると考えられる。

奴隷の境遇では、master と sir は、最も使う機会の多い、重要な単語であったろう。従って、far が Huck と同じ発音になっても、この2語の元の発音は保存されていたと考えられる。

次に sir と master の母音が同じわけではないが、この場合も亦保存された英国風の [a:] 音の与える印象を表すのに “sah” と綴ったのであろう。アメリカ人が英国人の発音を揶揄的に真似る場合に “I hear a bird” ならば “I heah a bard” というような綴字

を用いる。英の [æ] の方が舌の位置が低く、口の開きも大きいので、アメリカ人には [ɑ:] に近づいて聞える。それを誇張すれば、sir は “sah” となり、一見 master と同音になるわけである。marster の r は伝統的な綴字を用いただけのことであって、r と h の違いに意味があるわけではない。

(2) git, yit; tell, ef, ben; laig

get のように現在 e で綴られる語が git と綴られるという事は、[ɛ] 音と [ɪ] 音の間に動揺があったという事を意味する。17—8 世紀の記録で e を i と綴っているものは非常に多い\*。それが、18 世紀末以来、文法家によって排斥された結果、ほぼ駆逐されてしまったのである\*\*。Jim の発音にこれが残っているのは不思議ではない。

問題は ef (if), tell (till) 等である。git と較べると、一見 i の音と e の音が交代しているように見えるが、そんな事は考えられない。もしも Jim が get, till を /ɪ/ に属する中間的な母音で発音していたとすれば、if, till の場合には i の音を期待している者には心理的に /e/ に近く聞こえるわけである\*\*\*。その印象を ef, tell と表したものであろう。ben も bin (been) が同じように発音されていることを示す。これらの音は黒人だけでなく下層の方言に共通している。

one-laigged nigger (p. 64) というのが出て来るが、元来有声音の前で [ɛ] は延長する上に、Jim の間延びた発音がその印象を強めるので、こう綴ったものと思われる。

(3) kin, k'n, kiver

強勢のない場合 can は “kin” 又は “k'n” である (否定は can't, 強勢があると cain't)。Jim の発音は k'yard, g'yarden 等が示すように [k], [g] が口蓋音化していると考えられるから、その現れと見られる。kiver (cover) も同様である。これらの音は18世紀の下層音で文法家が直すべき発音として指摘していたものであった\*\*\*\*。Jim の外この作中の下層の一部にこの音がある。

\* Krapp, II, pp. 96-100. これが下層方言でない証拠として Krapp は Franklin からの例も挙げている。

\*\* 同上。

\*\*\* 越後方言でイとエが逆だと言うのも、どちらも中間の音を使っているの、イを期待する場合はエに聞こえ、反対の場合はイに聞こえるという事である。

\*\*\*\* Krapp, II, p. 165.

(4) sich; jedge

such, just, shut, judge は sich, jist (jis'), shet, jedge と綴られる。共に18世紀の下層の発音である\*。他の下層の人物もこの発音をする。同一人物が sich と言ったり sech と言ったりしており、その区別が環境や強勢と関係がないところを見ると、i と e の差は無視していいかと思われる。shet, jedge は i に綴ると色々な意味で工合が悪いからではなかろうか。これらも周囲に口蓋音やそれに近い音を持っていることが注意される。

(5) ketch, gether

catch, gather のこの発音は 18 世紀にはかなり多かった\*\*。(3) で述べたと同じことが考えられる。

あとは断片的であるが

(6) wrack; turrible

これらは e が i になる傾向と逆行する。同じ所で Jim が wrack と言ひ、Huck は wreck と言う。OED は wrack が16—7世紀に英国南部の作家によって好んで用いられたとしている。(wreck は北方音から)。Jim に古い発音が保存されていると考えるのは無理ではあるまい。

considable, tolable 等からも解るように Jim の発音は、音節を省いたりする無精な発音である点、又 r の音が弱いと推定される点から、terrible は殆ど [tá(r)əbl] という風に発音していたと考えられる。その印象を綴字に表わしたもので、-rri- は元の語の形を残す為であろう。e が r に牽引された事になる。

(7) tuck (took)

ゴルフの putt は put の変化形である。Emerson は put と nut で韻を踏ませている\*\*\*。Jim は当然 rounding も弱いと考えられるから、こう聞こえるのであろう。

(8) hoss; fust

hoss は Huck も使う。fust, wuth, nussery, bust 等は一般的である。どれも現在

\* Krapp, II, p. 165.

\*\* Krapp, II, p. 93.

\*\*\* Krapp, II, p. 166.



よく聞かれる音である。

(9) peart (pert)

OED には15世紀からある音で現在も方言に残る異音とある。

(10) bekase, 'kase, bekuz

bekase は古い発音が方言に残ったもの\*。bekuz の方は, because を弱く発音すればこうなるわけで, 視覚的效果を狙った綴字である。

(11) de yuther (the other)

Jim の発音では二つの母音の間にわたり音が入る。

(12) k'yard, g'yarden; specalatin'

口蓋音化しているので母音との間にわたり音が入る。k'yer (care) も同じ。最後の例では強勢のない音節で [kju] が発音に楽なように [kə] になったもの。ridiculous は ridicklous である。

(13) wuz, 'uz; end, en; misto, onless

すべて視覚的效果を狙った綴字である。前の群は標準語でも会話の際の音はこの様に綴ることができる。後者は幾分後によった [ə] の印象を綴字に表わしたものであろう。これらの語に含まれる [ə] 音が [ʌ], [ə], [o] 等に分化しているという事ではない。

### 3・1・2 二重母音

(1) p'int; gwyne

join, boil 等も jine, bile となる。これは Jim だけでなく, 作中の大部分に共通。

gwyne は便宜上ここにあげたが, 二つの母音の前の方が退化して母音的性質を失ったもので\*\*, 南部英国音から入った。この音は作中では黒人発音の目印のように使われている。

(2) 多くのものは単母音化している。

\* Krapp は case (=cause) から来ているとして John Easton: *Narrative* (1675) に cause, because がすべて case, becace となっているのを証拠として挙げている。

\*\* Jespersen: MEG, Vol. 1, pp. 37-8.

なお Krapp によれば, この音は New England と南方で一般的であったが, 19 世紀前半には廃れた。(II, p. 200)



(a) ag'in (again, against)

(b) dah, whah, whar, squah, dey's

whah と whar は容意的である。dey's は, "there is" と "they is" に当る。here は heah となる。

(c) po' (poor), do' (door)

外に asho', sholy (surely), bo'd'n-house 等。coase という綴字も coarse が同様に発音されていることを示す。

(d) skasely (scarcely)

(e) widder (widow)

便宜的にここにあげた。外に winder, taller (tallow) 等。

(f) doan'

どういう音を表すのかははっきりしないが, Krapp が New England や南部の方言音としてあげている, son, some の [ʌ] 音に lip-rounding をつけた音というのがこれに当るとされる\*。なお次例は強勢があると don't になる事を示す。

Doan' hurt me — don't! (p. 58)

### 3・1・3 子 音

(1) dat, wid

[ð] 音は d で表わされ, 黒人発音の目印となっている。dah, dey 等。

(2) bofe (both), sumpn (something)

[θ] は f, 時に p で表わされる。(1) と同じく, 近くの発音器官で代用したもの。breff, nuffn 等。something は sumfn のこともある。視覚的にも目立つ特徴である。

(3) out'n; nemmine

(1) と (2) は黒人だけであるが, 以下のものは他の者にもかなり広く見出される。

[v] 音は不安定で時に消え, never mind が nemmine となり, sort of, kind of は sorter, kinder となる。これらは他の下層の者にも見られる。

(4) comin'; court'n'

\* Krapp, II, p. 132. cloak, toad の例をあげて。

-ing が -in' になるのは, Huck 以下の層に共通する。前の gwyne の外無数。時に i も省略され, court'n' のようになる。nuffn 等もその例である。以下断片的になるが

(5) cretur 2・2・2 参照

(6) turkle; ast; ax

turkle については, 2・2・2 参照。ast はその逆で俗語の音。ax は南部英語の形で 16世紀迄は文章語にも用いられたが, 北方系の ask に代られ, 方言に残った。Jim には ast, ax 両方がある。

(7) hearn; stannin'

hearn は heard。最後の閉止音が鼻音になっている。stand は stan' と d が落ちるので stannin' の形が生れる。同じ様にして kiner は kind of から来る。Jim でない黒人に hannel (handle) という例がある。

### 3・1・4 音の脱落

音や音節の脱落の多いのが Jim の発音の一つの特徴である。他の人物にも見られるが, 程度がまるで違う。

#### 3・1・41 語頭音

(1) 母音 'bout, 'long, etc.; 'nough, 'f (if)

(2) 子音 'at (that); 'uz (was); 'um (him) 後の二つは専ら視覚的印象を強める為である。

(3) 音節 'fore (before), 'kase (bekase), 'terpret; 'member (remember); 'sturb, spute; 'dout (without); 'spec' (expect)

#### 3・1・42 語尾子音の脱落

l, n の後の d, t がよく落ちる。ole, chile; roun', islan', fren's, han's; doan', kep' 等。

2語から成る句の前の語尾子音が落ちて1語となるものに o'course, course; lemme 等があるが, これは Jim の外に広く分布している。

#### 3・1・43 語中音の脱落

(1) 母音 b'long, strawbries, Ab'litionist, pow'ful

(2) 子音 (r) fum, thoo; (w) innerds, consekens; (t) genlmen, waseful,

gashly (ghastly), amongs'; (d) chillen; (l) yo'se'f, on'y; (j) reglar, ridicklous;  
(f) arter

(3) 音節 considerable, tolable, diffunt, hund'd, pooty, som'ers; bymeby

先にあげた nemmine, lemme では v, t が m に吸収されてしまい, bymeby (by and by) は by'n'by から b の影響で bymeby となる。後者は黒人だけの特徴となっている。

### 3・1・5 音の追加

(1) de yuther (the other) については 3・1・1の (11) で述べた。dish yer (this here) も here の h が消えてわたり音が入ったもの。here, ear を yer, year とするのは黒人その他の方言にある。

(2) fambly Huckの chimbly と同じ。

(3) "Yes-indeedy", "Looky here" という形は、他の下層の人物にも多い。

(4) acrost, wisht, wunst (once), twyste (twice) この t 音の追加は他の下層の人物にも見られるが、黒人の場合は遙かに頻度が高い。

### 3・2 文 法

文法的に最も著しい特徴は、主語と動詞の一致・動詞の省略その他である。特徴的な点を拾い上げることにする。

#### 3・2・1 一 致

全体に単純化されていると言うことができる。

(1) be

1・2・3 人称を通じて、単数形も複数形も、現在は is, 過去は wuz ('uz) である。この点普通の Pike County 方言と著しく異なる。

否定は、現在がすべて ain't, 過去は warn't で大体 Huck 等と同じである。

Is I heah, or whar is I? (p. 117) // Say, who is you? Whar is you? (p. 7)  
dese kings o' ourn is reglar rapsallions (p. 212) // dey ain't no sense in a  
cat talkin' like a man. (p. 111)

I 'uz powerful sorry you's killed (p. 61) // I warn't lucky (p. 65)

(2) 他の動詞

(a) 原則的に1・2・3人称共に、単数形も複数形も現在は -s をつける。否定は *doan'* を共通に用いる。

What *does* I do? (p. 108) // Now dat's what I *wants* to know (p. 117) // Da you *goes* (p. 125) // *Does* you know 'bout that chile...? (p. 108) // She *pecks* on me all de time (p. 60) // dey *knows* I *goes* off wid de cattle (p. 61) // en trash is what people is dat *puts* dirt on de head er dey fren's en *makes* 'em ashamed (p. 119)

(b) しかし “I reckon”, “I lay (=bet)”, “I 'spec'”, “They say” 等文頭に来る定型的表現は -s を伴わない。強意表現の “take and” に続く時も同じ。

Does I shin aroun' amongs' neighbors...? No; I take en *whack* de bill in two, en *give* half un it to you (p. 108)

又 “How you talk!” という定型的表現においても -s はつかない。

(c) 標準語で were to, should を伴うような仮定の場合も -s はつかない。

But de trouble all done ef de snake *bite* me while I's a-tryin' him (p. 362)  
そのすぐ後に続く次の例では -s がついているが、仮定の意味が異っている。

but ef you en Huck *felches* a rattlesnake for me to tame, I's gwyne to leave (p. 362)

(d) 1・2人称疑問文では (a), (b) の例にあるように *does* が用いられるのに、3人称の疑問文では単数でも *do* が用いられる。

How do dat come? (p. 110) // How much do a king git? (p. 107) // what do dey stan' for? (p. 119)

(e) 次の諸例では、-s のないのにそれぞれ別の理由がある。

you *take* a man dat's got on'y one or two chillen (p. 109)

これは “Suppose you take...” である。

well, now, I *be* ding-busted (p. 110)

には *will* が省略されており、

He as soon *chop* a chile in two as a cat (p. 109)

は “He would as soon...” である。



(f) しかし説明のつかない矛盾もある。(a)の2番目の例には *want* に *-s* があるのに “Now I *want* to ast you.” (p. 108) にはない。また “He *know* how to value ‘em.” (p. 109) は前後から見て (a) の5番目の例と矛盾する。勿論原則とも矛盾する。これらは共に強意的に *want* や *know* を使っているとも考えられる。“But dis one *do* smell so like de nation, Huck” (p. 214) という明らかな強意表現の例があるので、或は強意的に使った時に *-s* をつけないのかとも思われるが、断定できるだけの資料はない。

(g) *begin, come, hear, live* その他現在形と過去形が同一の動詞が多いので、一見 *-s* の使用が乱雑のように思われるが、調べてみると *-s* のないのは過去形である。その結果、実際には規則的に使われていることが解る。*-s* のない動詞は過去形という感じさえる位である。一例をあげよう。Jim が娘の聲になったことに初めて気づく所である。

My breff mos' *hop* outer me; en I *feel* so — so — I doan' know how I *feel*.  
I crope out,... en crope aroun' en *open* de do' easy en slow... en all uv a sudden I *says* pow! jis' as loud as I could yell. She never *budge*; oh, Huck, I *bust* out a-cryin' en *grab* her up in my arms, en *say*, 'oh, de po' little thing!...' (p. 216)

過去形のはっきりした動詞（この中では *crope*）と助動詞の外、すべて現在形と同じである。つまり Jim の言語では過去形は最少限の動詞に止められているという事が言える。

### 3・2・2 動詞の省略

最初に述べたように、これは Jim の方言の最も著しい特徴の一つである。述語動詞が省かれる。

who dah? (p. 6) // You gwyne to have considable trouble in yo' life (p. 25)  
この様に *be* を省くのは非常に多い。

Dah, now Huck, what I tell you? (p. 404)  
*did* が省かれている。上の2例の様に *be* や *do* を省くのは Huck にない。(be ~ ing to の *be* を除く。)

I ben rich wunst (p. 64) // I couldn't ever ben free ef it hadn' ben for Huck.

(p. 124)

この様に have を省くのは Huck 等にもあるが、特に後の例の場合は一般的である。

### 3・2・3 活用その他

動詞の活用も単純化されている。say, feel 等も現在・過去同形で Pike County 方言一般よりもその仲間が多い。(この点については3・2・1 (g) 参照)

set の過去形は sot, sent は sont。この作品では殆ど黒人に限る。“done+p. p.” という形もそうである。

She [raft] *done broke* loose en gone! (p. 97) // I 'd *done forgot* it. (p. 107)

“a-goin'” の類が多いのは全体と共通。

ain't と hain't は大体 be と have に使い分けるが、入り乱れることが多く、それ以外の動詞の来るべき所に用いられることもある。次の例は標準語ならば “wouldn't it?” となるべき所である。Jim としては、前の文を it で承けて、“isn't it (so)?” というような積りである様に見える。いずれにしても、この辺になると不正確である。

He'd let me shove his head in my mouf — for a favor, hain't it? (p. 362)

### 3・2・4 代名詞

yourn, ourn 等を用いるのは全体に共通。“Round de which?” (p. 107) のように which を what の代りに使うのは、King 等の下層の方言にも共通している。

### 3・2・5 その他

名詞の後に代名詞を重ねて強調する点, than の後を what-clause にする点, 仮定の条件節に余分な have を加える点など, 余剰語については, Huck 等と全く同じである。

De widder *she* try to get her [Miss Watson] to say she wouldn't do it (p. 60)

dey ain't nobody kin git up a plan dat's mo' mixed up den *what dat one wuz*. (p. 380)

well, you wouldn't 'a' ben here 'f it hadn't 'a' ben for Jim. (p. 68)

多重否定, to を for to (Jim の場合は fer to) にする等の点は全体と共通している。

以上から, Jim の言語は音韻・文法の両面に互って, はっきりした特異性を持っており, 更に発音は実際の差以上に, 綴字によって視覚的にも一層特徴づけられていることが

解るのである。

#### 4 南西部辺地方言

作者が巻頭のことわり書きの中で、「南西部辺方言の極端なもの」として挙げているものがどれであるかを考えてみたい。

Jim は別として、量的には少ないが、他の Pike County 方言と著しく異った印象を与える方言が2種類ある。一つは、XLI に出てくる、Mrs. Hotchkiss その他の Aunt Sally の隣人の女たちのそれであり、一つは XXI に出てくる Boggs 等のそれである。紙面からの視覚的印象は、前者の方が平均的な Pike County 方言からより遠いように思われるが、言語の性質からも、亦言語外の客観的条件からも、作者の指しているのは後者であると判断される。

場面は、Mississippi 河に浸食されて年々後退して行く貧しい町——泥んこの通りに牝豚が仔豚を連れて寝そべり、それを終日ブラブラして退屈している連中が追いまわして喜ぶというような、文化程度の低い町である。Boggs 等は更にその奥地からわざわざこの町に出て来たのである。

言語も、下層の特徴を多く含んでおり、中でも黒人方言との共通点が多いのが目立つ。

(1) “gwyne to”, “a-gwyne to” はこの作品では黒人の特徴のように扱われ、外にそれを使うものはないが、Boggs 等にそれがあるのは特異である。

(2) 外にも次にあげるような、Jim と共通する特徴が多い。

(a) 語頭、語中・語尾の音の脱落が、僅かの資料の中で目立っている。それらすべて Jim と共通する。'bout, 'cuz // f'm, off'n (off of) // gimme, lemme, thousan' 等。

(b) wisht, wunst 等 t 音の追加。

(c) jist, cler, whar 等。(waw-path という綴字も r の響かない音であることを示す。)

(d) been は ben である。

(e) sick (seek), borry (borrow) 等、この作品の中で特異な音を含んでいる。borrow は Huck 等の発音では borrar となる筈であるが、これは [ə] が更に [ɪ] に変



ったものであろう\*。

以上(2)にあげた特徴は黒人以外の人物にも存在するが、僅かの発言の中で、これ程多く集中的に存在している例は外にない。

この方言を特色づけるのに、作者は初めに出てくる情景の描写を巧みに利用している。活気のない町に集まる無気力な男達の間延びた会話を写すことによって、その言語のもつ雰囲気を描いて、量の少なさを補っているのである。更に、きびきびした Sherburn の発言を対照的に配することによって効果は一層高まる。言語的には主として発音により、更に言語外の要素を導入することによって、この方言を特徴づけていると言える。

## 5 Pike County 方言

作者の言う「普通の」Pike County 方言と、その変種4種類が、どの人物の言語に当たるかを調べるために、残りの20人程の人物の言語を検討して行くうちに、境界線は明確でないにしても、いくつかの群に分れることが解った。

それらの言語は、共通の基盤をもちながら、少しずつ異った要素を含んでいる。両端のものを比較すればその相違は明白で、容易に区分できる。しかし中間のものになると、異った要素は何人かが共有しているので、どれを目安にするかによって分類が異ってくる。又発言が少ない為にははっきりした特徴を掴めない場合も出て来る。

筆者は先ず、標準語に最も近いものと、最も遠いものとを分けた。これは容易である。次に中間のものについては、Huck の言語を基準にして、それより前者に近いもの、後者に近いものという風に区分して行った。その結果、勿論ははっきり区分できないものも残ったが、全体を凡そ5群に分けることができた。

### 4・1 Sherburn, Thatcher, Dr. Robinson, Grangerford

これらの人々は、程度の差はあれ、方言的要素を持っはいるが、最も標準語に近いものを話す。その方言的要素というのも僅かで、多くは当時あっては口語的と考えられる

\* 語尾の強勢のない [ə] を [ɪ] と発音するのは、標準語からは消失したが、Krapp によれば17世紀の記録に多く見られ、19世紀に入っても一部に残っていた。(II, pp. 250-1).



程度のものである。代表的なものとして Colonel Sherburn がリンチに来た群集に向けてした発言を例にとろう。

Do I know you? I know you clear through. I was born and raised in the South, and I've lived in the North; so I know the average all round. The average man's a coward. In the North he lets anybody walk over him that wants to, and goes home and prays for a humble spirit to bear it. In the South one man, all by himself, has stopped a stage full of men in the daytime, and robbed the lot. Your newspapers call you a brave people so much that you think you are braver than any other people — whereas you're just as brave, and no braver.... Your mistake is, that you didn't bring a man with you; that's one mistake, and *the other*<sup>(1)</sup> is that you didn't come in the dark and fetch your masks. ... You brought part of a man — Buck Harkness, there — and *if you hadn't had*<sup>(2)</sup> him to start you, you'd 'a' taken it out in blowing.

You didn't want to come. The average man *don't*<sup>(3)</sup> like trouble and danger. You don't like trouble and danger. But if only half a man — like Buck Harkness, there — shouts 'Lynch him! lynch him!' you're afraid to back down — afraid you'll be found out to be what you are — cowards — ... (pp. 202-3)

イタリックの (3) のような表現はなる程、この方言に共通ではあるが、当時の口語と考えてもいいものである\*。(1) が *t'other* でなく、(2) に余分な 'a' がない点は他の一般の人々と異なる。演説であるという事もあるが、殆ど標準語と言ってよい。Thatcher の発言はごく少ないが正確であり、Grangerford は *ain't* を用いるが、これも口語と言ってよい。外は標準語である。Dr. Robinson (XXIX 外) になると、*t'other*, *somewheres* 等の語、複数主語を単数動詞で承けるなど、この方言の要素はやや多くなるが、それは僅かである。又これらの人々は上層階級に属する。従って彼等のものを、教育ある上層の社

\* Mencken, IX 2 には南部アメリカでは教養のある人にも使われるとある。

会的方言として区別していいであろう。

#### 4・2 Mrs. Hotchkiss その他 (XLI)

僅か2頁位しかないが、4・1と対照的に方言的要素の多い女性語である。イタリックや省略符号が多く、一目で他と区別がつく。

(1) 昂奮しているとはいえ、イタリックの語がやたらに多いことは、激しい抑揚を示す。

(2) s'I, s'e, sh-she (says I, says he, says she) を極端に多用する。

(3) Mr., Mrs. の代りに Brer\*, Sister を使う。(Mrs. Phelps は Brer ではなく、Brother と呼ぶ。)

以上はこの作品では特異的である。

(4) 音韻の点では、

(a) ben, hearn, sich, jist, kiver, thar, that-air (that there), out'n, natcherl 等 Jim や最下層の者と共通の音が多い。

(b) 'at, 't (that), 't's (that is), 's (as), 'a' (have), an, 'n (and) 等、音の省略が多いのも同じ。

(c) 反面 and を除けば語尾子音の脱落は少なく、mind, find, raft 等はそのままである。又 help の l も落ちない。gwyne はなく goin' である。

(5) 文法的には them を主語に、或は those の意味で使うとか、複数主語を単数動詞で承けるなど、この方言一般と共通であるが、Huck より寧ろ正確な位である。

単調な短いセンテンスを反覆する、無駄の多い無教養なこの方言の例を一つ引こう。

You may *well* say it, Brer Hightower! It's jist as I was a-sayin' to Brer Phelps, his own self. S'e, what do *you* think of it, Sister Hotchkiss? s'e. Think o' what, Brer Phelps? s'I. Think o' that bed-leg sawed off that a way? s'e. *Think* of it? s'I. I lay it never sawed *itself* off, s'I — somebody *sawed* it, s'I; that's my opinion, take it or leave it, it mayn't be no 'count,

\* Krapp (I, p. 249) によれば、Brer は Brother の [ð] が消えたもの、黒人の発音としてある。

s'I, but sich as 't is, it's my opinion, s'I, 'n if anybody k'n start a better one, s'I, let him *do* it, s'I, that's all. (p. 387)

女性皆が大体この様に話す。この方言は発音に特徴があり、而もそれを視覚的に目立たせてある。中層の人々のようであるから、地域的な変種と考えるべきであろう。

#### 4・3 King と Duke

この二人のペテン師の言語を同じ部類に入れることはできないが、説明の便宜上、一緒に扱うことにする。

##### 4・3・1 King

彼の言語は最下層の社会方言に属する。内容もだが、言語的に下層の特徴を多く含んでいる。特徴は発音に最も顕著に現われている。一々あげるのはやめて、標準語との隔りを示す著しいものに止める。

(1) 黒人や最下層と共通のものが多い。

whar, thar; ben; sejest, sech, jest (時に sich, jist); h'yer, this h'yer, thish yer, theseyer; k'yer (care); aluz; he'p; oncommon, sorrer

Jim は g'yirl だが、彼は gal で近い。Jim の po', yo' は pore, yer である。

これらは Jim と King の外は、少数のものに部分的に見られるだけで、この様に多量に含んでいるものはない。

(2) kin, k'n; f'r, y'r; noth'n', goin'; out'n; clost, wisht など。これは他の者にも見られるが、常習的に用いるのは Huck よりも下の層に限られる。

(3) 文法的には一致、活用その他の点で一般と変らないが、単語の誤や、次例のような which と what の誤などは無教養を示す。

Hamlet's which? (p. 189) (反問して)

即ち、下層の変種として、彼の言語は発音の点で特徴づけられている。

##### 4・3・2 Duke

King の言語と明白に異っている。互に名門の末裔と嘘の名乗りをあげる所を引用するが、二人の言語的な差が顕著である。

"Yes. My great-grandfather, eldest son of the Duke of Bridgewater, fled to this country about the end of the last century, to breathe the pure air



of freedom; married here, and died, leaving a son, his own father dying about the same time. The second son of the late duke seized the titles and estates — the infant real duke was ignored. I am the lineal descendant of that infant — I am the rightful Duke of Bridgewater; and here am I, forlorn, torn from my high estate, hunted of men, despised by the cold world, ragged, worn, heartbroken, and degraded to the companionship of felons on a raft!" (pp. 170-1)

と Duke が芝居がかった名乗りをあげると、一方 King も負けじと言う。

"Bilgewater, I am the late Dauphin!" ... Then the duke says:

"You are what?"

"Yes, my friend, it is too true — your eyes is lookin' at this very moment on the pore disappeared Dauphin, Looy the Seventeen, son of Looy the Sixteen and Marry Antonette."

"You! At your age! No! You mean you're the late Charlemagne; you must be six or seven hundred years old at the very least."

"Trouble has done it, Bilgewater, trouble has done it; trouble has brung these gray hairs and this premature balditude. Yes, gentlemen, you see before you, in blue jeans and misery, the wanderin', exiled, trampled-on, and sufferin' rightful King of France." (p. 172)

語彙、発音、文法のすべてに差が現われている。発言の全体を見ると Duke は (1) 語彙が豊富でレベルが高く、(2) *generly*, *les'*, *fitten* 等の広く分布している方言音はあるが、下層に多いものはない。たとえば Duke は *-ing* で、King は *-in'* である。難かしい単語の発音は Duke の方が Huck より正確である\*。(3) 文法的には "you was" とか "単数主語 + don't" というような、当時では口語と考えられる形はあるが、Huck よりもかえって正しい。Huck が主に "I got" であるのに対して、Duke は常に "I've got", "she's got" である。又 "Here *are* the costumes" (p. 180) は、Huck その他

\* Huck は *julery* というが Duke に *jewelry* である。



では *is* である。“if it hadn't been for that they'd 'a' jailed us” (p. 286) にはこの方言共通の冗語 ‘a’ がない。

相手によって下層の方言を使うが、Duke は本来もっと上層の——つまり「普通の」——Pike County 方言を話していることが解る。

#### 4・3・3 Jim Turner, Bill, Jake (XII—XIII); 船長 (XIII)

この3人の悪者は大体 King と同じ層の方言である。a-goin', noth'n'; yit, jist (jest), git; orter, sorter (sort of); better'n (than); aroun' 等の発音が少ない発言の中に多く混っているのは、下層の方言である事を示す。Jim Turner は be の否定に hain't を使っている。have に ain't を使うのはよくあるが、be に hain't を使うのは例外的である。この [h] が他の母音に及ぶかどうかを判断するだけの発言はない。

船長も大体同じ層に属する。“we all” を *is* で承ける語法もある。git, -in' 等は上の者と同じ。彼の場合は僅かの発言に大量の oath を入れて船乗りらしい特徴を与えている。

#### 4・3・4 Pap

Huck の父の発言は乱暴で、Huck の言語と著しく異った印象を受けるが、分析してみると主として内容から来ているもので、言語的には余り大きな差はない。

文法的には平均的で、下層の特徴はない。発音では、git という音があるが、jist はなく just である。-ing が時々 -in' になったりする事はある。

全体として、Huck と同程度で、下層の要素がやや多く含まれているだけである。

#### 4・4・1 Wilks 姉妹その他

以下 Huck の言語と同程度乃至やや上と思われる言語に移る。

King と Duke に遺産を横領されようとする、Mary Jane, Susan, Joanna の姉妹と、弁護士の Levi Bell は平均よりやや上の群に属する。特に Mary Jane は19才で、長女として躰けられているせいか、4・1の群に入れてもいい位である。二重否定・ain't, hain't・一致の不安定等の共通の特徴はもっているが、その他は正確である。“he got”, they got” でなく “he's got”, “they've got” であり、go の過去分詞が went でなく gone である点は Huck より正確である。-in', sich 等の発音は全くない。

なお長女は妹より一致が正確であり、there は彼女が普通の綴字であるのに対して妹が

ther であるなど、教育の差を示すのか、細かい差をつけてある。

#### 4・4・2 Buck Grangerford

父母がこの作品の中で最も標準的な言語を話すのに、この末子の発言には下層の要素が多く含まれている。兄や姉がそうでない所を見ると、大人として寝けられて居らず、使用人の言語の影響を受けているのであろう。

文法的には Huck と同程度であるが、発音に下層の要素が多い。(a) 'low, 'cuz; kep', agin (against) 等の音の脱落が目立つ。(b) a- ~ ing の形が著しく多く、a- ~ in' の形が混る。(c) been は Jim の外少数のものと同じ ben である。

#### 4・4・3 Tom Sawyer

Huck と Tom は同じ方言を話すが、境遇の違いから来る当然の差が現われている。二人の発言は、小部分をとってもはっきり異っている。一つには、積極的と消極的な性格、主動的と受動的な役割からも来るが、言語的にも異っている。

(1) 何よりも語彙に差がある。読書の差から Tom は遙かに豊富で程度が高い。

(2) 文法的には大きな差はないが、細かな点で異っている。(a) Huck が大抵 "I (he, etc.) got" であるのに Tom は have を入れ "I've got" の事が多い。"I've seen it in books." (p. 12) は Huck ならば "I seen it." である。(b) 二重否定にも微妙な差がある。

I ain't joking, *either*, (p. 314) [Tom]

I don't want it at all — nor the six thonsand, *nuther*, (p. 23) [Huck]

前の *either* の使い方は Huck にはない。(c) 一致の点で、Huck が複数名詞を単数動詞で承けるのに対して、Tom は正しい一致を守る場合がある。学校で教えられていることが、相手によって崩れるということであろうか。単なる不注意や誤植と思えない程度々ある。

the way the best authorities *does* is... (p. 331)

Some authorities *think* different (p. 11)

#### 4・4・4 Mrs. Judith Loftus (XI)

Huck の女装を見破る抜目のない女である。文法的には平均的で無教養の者と異っており、発音にも下層の特徴はなく、get, judge, can, -ing 等は変りない。それだけに

cheer (chair), ben, sence, Elexander という一連の発音が目立っているから、特にここにあげたものである。引越して来たばかりと言っているから、或は地域的な特徴なのかも知れない。

#### 4・4・5 Aunt Sally (Mrs. Phelps)

Aunt Polly と姉妹であるが、現在はずっと下流の南部に住んでいる。文法的には平均的であるが、発音に本来その階層にない特徴を多く含んでいる。(a) b'lieve, kep', 'd (had, did), 'a' (have) その他音の脱落が Jim や下層の者に似て多い。(b) er (or), cler (clear), ther (there), wher, shet (shut) 等、4・2に述べた隣人達と共通の発音が多い。

こういう点から、「普通の」Pike County 方言に地域的影響があった一変種と考えられるようである。

その外、僅かの発言しかない人物が何人かおり、中には g'yirls という特徴的な発音をするものもあるが、資料が不足で十分に特徴を掴むことはできない。

#### 4・5

以上述べて来たように、社会的方言の性質が濃いものは比較的分類し易い。(4・1 Sherburn や4・3の King 等) Tom, Huck を初め多くの人々がその中間にある。Duke は社会的には下層であるが、言語は「普通」の部類に入れてよい。4・2の Mrs. Hotchkiss 等は社会的に下層ではないが、同じ層の人々とはっきり違った特徴をもっているで、地域的な変種と考えられる。

こうして、「普通」の Pike County 方言の外に3種類迄は指摘できる。即ち、(a) Sherburn 等の教養ある人々の言語、(b) King 等の下層の言語、(c) Mrs. Hotchkiss 等の地域的方言である。残る1種を何とすべきであろうか。Huck を境にして「普通」のものを上下に二分することも考えられる。又4・4・4の Mrs. Loftus も或は地域的な変種かも知れない。しかしどちらも十分な根拠を欠いている。筆者は試案として Aunt Sally の言語を、地域的影響を受けた一変種としてあげたいのである。

明確に4変種全部を指摘し得ないのは、勿論筆者の知識不足によるものである。しかし一方、作者は果して全部を指摘するに足る特徴を、量的にも十分に盛り込んでいるのだろうかという疑問が筆者の念頭を掠めることも否定できない。



## 5 効

## 果

最後に、作者がわざわざ骨を折って多くの方言を盛り込んだことに、如何なる効果があったかという事について一言いたい。

Twain が言語に興味を持ち、又 Pike County の人間に対すると同様にその方言にも一種の愛着を感じていた事は疑ない。しかし、ただそれだけの理由でこの様に方言を盛りこんだのであろうか。単なる道楽なのであろうか。

Dickens は登場人物の身体的特徴を戯画的に迄誇張することによって、その印象を鮮明にした作家として知られている。この作品ではしかし、身体的な特徴は余り描かれていない。読者の印象に残るのは、King の禿頭と Pap の異様に髪の毛の長い、青白い顔位のものである。それにも拘らず多数の登場人物の印象は稀薄でも、不鮮明でもない。彼等の印象がその行動と結びついている点もなるほどある。しかし筆者は、その外に作者が言語によって人物を特徴づけ、その印象を明確にする一助としている点を指摘したい。

Huck と Jim は元来すべての点で対照的であるが、一瞥してははっきりと区別のつくその言語が、対照を一層鮮明にしている。King と Duke は、発言の内容はさておき、言語の違いによっても明確に描き分けられている。Tom と Huck という似通った人物も同じく言語的な相違が、描かれた個性の差に一役買っているのである。

細かな例をあげるならば、King 等が化けの皮を剥がされようとする場面 (XXIX) で、彼と医師、弁護士、その他が入り乱れて発言するにも拘らず、混乱した印象を与えないのは、一つには彼等の言語の違いによる。Aunt Sally の家に近所の人々が集ってガヤガヤする場面 (XLI) でも、女の言葉と男の言葉、そしてそれらと Aunt Sally の言葉が描き分けられているので、発言者ははっきり区別される。

この様に、この作品に盛られた方言は、地方色の醸成という点を別にしても、人物表現に大きな役割を演じているのであって、決して作者のひとりよがりによって終ってはいない。仮に読者がそれらの方言の差に大して気づかないにせよ——恐らく多くの読者はその点に無関心であろう——言語の差が場面毎に人物像を鮮明にするのを助けている。読者が言語の差をはっきり意識するか否かは決して問題ではない。言語の差が生む漠然とした印象が人

物像と結合して、読者の気付かぬうちにそれを鮮明にするのである。

作者が巻頭で、方言について一見気障に思える発言をしているのは、案外、この点に読者の関心を惹くために、計算ずくでやったことかも知れない。

## SUMMARY

The present writer tried (1) to identify the seven dialects enumerated in EXPLANATORY, using Huck's language as a yardstick; (2) to point out the features, linguistic and extralinguistic, which characterize them; and (3) to clarify the role of those dialects. To summarize the result:

(1) The Missouri negro dialect is spoken, of course, by Jim. "The extremest form of the backwoods Southwestern dialect" is used by Boggs, etc. This we can conclude from the peculiar quality of their pronunciation and from Huck's referring to their coming from the country to the "one-horse town" in Arkansas. The "ordinary" Pike County dialect is the language of many characters ranging from Wilks sisters to Duke. The language of Colonel Sherburn and Saul Grangerford constitutes a separate category as an educated upper-class variety. That of King is an uneducated lower-class variety. Mrs. Hotchkiss speaks another variety, probably regional, which is not socially low but removed from the standard. The writer regrets to say that he cannot make any definite statement about the fourth, but he tentatively suggests the language of Aunt Sally as the "ordinary" Pike County dialect subjected to regional influence.

(2) Jim's language is characterized both by pronunciation and by grammar, but the others chiefly by pronunciation. In many of them spelling is utilized to strengthen the visual impression of idiosyncrasy. In the case of Mrs. Hotchkiss such typographical devices as italics and apostrophes are also used for the same purpose.

(3) The dialects are useful in giving distinctive traits to the characters. Even if the reader cannot well distinguish between the dialects used, a vague impression produced by them in the reader's mind blends, without his knowing it, with the images of the characters otherwise formed, making them clearer and more easily distinguishable from each other.